

落語教室の体験は何をもたらすか¹勝谷紀子²

【要約】

地域の落語教室で落語を演じる体験は何をもたらしているのかを検討した。都内の落語教室に通っているアマチュア落語家を対象にオンラインで調査を行った。研究1では、落語の視聴、落語の稽古、落語の口演体験によりどのような影響があったか、落語体験とユーモアスタイルやユーモアを用いたストレス対処との関連を調べた、研究2では、社会的資源としての落語教室に通うことの影響やその存在意義を自由記述で明らかにするとともに、落語体験が落語への愛着のみならず日本文化への愛着とも関わるか、他者一般への信頼感とも関連するかを検討した。その結果、自由記述より落語体験が人間関係の広がり、コミュニケーションを始めとする各種スキルの獲得、落語を始めとする日本文化の文化への愛着につながる言及が見出された（研究1）。研究2より、高座に上がる回数が多い人ほど日本文化への愛着が高く、日本文化への愛着が高いほど落語への愛着も高く人ほど、落語への愛着の高さが「私は、人を信頼するほうである」の高さに繋がった。高座に上がる回数が多いほど、「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」に否定的という予期せぬ結果も見られた。

キーワード：落語、社会的信頼、社会的資源、日本文化への愛着、落語への愛着

1. 問題と目的

日本の伝統芸能のひとつである落語は、滑稽な話、人情に訴える話などを扇子と手ぬぐいを用いた身振りで物語を進めながら、複数の役割を一人で演じ分ける芸である（文化デジタルライブラリーウェブサイト「落語：早わかり」より）。座布団に座ったまま会話を中心としたやり取りを進め、噺の最後に「オチ」がつくことや、演者の技巧と聴き手の想像力で噺の世界が広がることも特徴である（「落語芸術協会」ウェブサイトより）。

落語を鑑賞する経験は、笑い以外にも感動などさまざまな感情を喚起するだけでなく自分の体験を照らし合わせた思考を喚起させ、没頭体験なども起こさせる（野村, 2013）。また、落語の鑑賞によって、観客と演者の反応の協調（野村・丸野, 2007）、自発的なまばたき反応の同期（野村・岡田, 2014）がおこることが示されている。落語の鑑賞という体験は演者から観客への一方的な伝達ではなく鑑賞時の短時間に起こる影響がある双方の相互作用行為であることがうかがえる。落語の鑑賞体験を教育場面に活用しようという教育実践もなされている。落語

1 本論文のデータの一部は2021年にオンライン開催された日本心理学会大会第85回大会で報告した。

2 東京大学先端科学技術研究センター当事者研究分野特任助教

を導入した授業実践で生徒の姿勢が良くなる、質問行動が増える、保護者面談がしやすいなどの変化（小田・東海林, 2017）が示されている。その他、法律や制度など複雑な問題の啓発の導入として題材を落語にしたものを鑑賞する時間をとり入れ、理解を深めるために活かそうという活動も行われている。

一方、自分で落語を実演する経験も、演者自身にもさまざまな影響をもたらすと考えられる。落語を実演するまでには、さまざまな噺から習得する噺を選び、噺を覚え、落語を演じる稽古を繰り返しながら実際に観客の前で演じるという一連のプロセスがある。こうした活動に取り組む中でただ噺を習得する以外にどのような影響が演者にあるのだろうか。本研究では、落語を演じることを生業としているプロの噺家とは異なり、社会人落語家（あるいはアマチュア落語家、いわゆる天狗連）とよばれる人々に焦点を当てる。

社会人落語家とは、本業は他に持ちながら、落語教室や落語愛好会などに通って落語の稽古を重ね、余興、ボランティアの落語会や落語コンクールなどに無償で出演し、落語を演じる人々である。年齢、出身、職業、落語を始めたきっかけが多様である。大阪で行われる「社会人落語日本一決定戦」では、例年さまざまな地域から多様な職業の出場者が出場している。では、社会人落語家にとって、職業でなく趣味の一環として自分で落語を演じる体験はその人の人生に何をもたらすのだろうか。また、演じるために稽古を重ねたり、落語を鑑賞したりする行動は本人に何をもたらすのだろうか。本研究では、リサーチクエスションとして、社会人落語家にとって自分で落語を演じる体験、稽古をする体験、鑑賞をする体験（以下、落語体験）が落語の知識や落語を演じる技能以外の知識や技能などの獲得をもたらすかを検討する。

まず、研究1では、獲得すると予測される技能としてユーモアに関する技能、具体的にはユーモアスタイルとユーモアストレスコーピングについてとりあげる。第一に、社会人落語家にとって自分で落語を演じる体験はユーモアを活用する機会が増える体験でもあることから、ユーモアスタイルの獲得につながるのではないかと考えた。第2に、獲得しうるスキルとして、ユーモアをストレス対処行動として活用する可能性を考えた。すなわち、日常生活でストレスに感じるがあっても、それを笑いのネタにしたり、ユーモアのある部分を見出したりするような対処のありかたで、ユーモアストレスコーピングとよばれる（楯本・山崎, 2010; 清水, 2006）。落語には笑いを誘うような要素を含む滑稽噺というジャンルがあるが、その他のジャンルにおいても噺の要素にユーモアを見出したり、笑いを誘うような部分を見出す解釈をしたりして演じることがある。また、落語を演じる際、噺に入る前の導入部分である「枕」において雑談的な話をすることがある。その後演じられる噺に関わる題材か語られることが多いが、この中で時事ネタや自身の失敗談をおかしく語ることもある。いわば枕のために社会問題や自身の体験を鑑賞できるものとして再構成する作業をすることになる。この作業がストレス対処を自ずと伴っているのではないかと考えられる。こうしたことから、落語経験を重ねることはユーモアストレス対処の獲得につながり、ユーモアストレス対処をするほど精神的健康度も高いと予測した。

第3に、社会的資源を通じて自身が生きる文化を理解することで発生する社会的信頼の獲得の可能性を検討する。自分が生きる社会は信頼に足るものだという社会的信頼は、社会関係資本の重要な一要素である。社会的信頼の規定に関わる要因には、組織への信頼の規定因として親近感(山崎・高木・池田・堀井, 2008)、地域文化資源の鑑賞(林, 2021)があげられている。そのうち、林(2021)は、近畿圏在住の57名を対象に、大坂画壇の鑑賞が大阪や大阪人への愛着を生み出すか、これらが大阪人への信頼を促進するかを検討している。その結果、大坂画壇を高く評価すると大阪人への愛着が高まり、さらに大阪人への愛着から大阪人への信頼が高まることが示された。

古典落語は江戸時代が舞台となった話が演じられることが多い。噺を深く理解し、登場人物をより豊かに描写するためには、噺の舞台となった当時の風俗、文化も深く知ることが求められる。稽古歴が長いと、習得したさまざまな噺に関連する日本の歴史、風俗や文化への理解も深まり、それとともに日本文化への愛着も高まると予想される。また、笑いを活用することで社会的信頼関係が創出、構築されるという浦(2021)の指摘もある。これらの知見をふまえて考えると、落語体験が長いと、落語を高く評価し、日本文化や日本人の愛着が高まり、それによって他者一般への信頼も高いのではないかと考えた。

1-1. 本研究の目的

以上の議論から、本研究では社会人落語家を対象に落語体験(落語の稽古、高座に上がって落語を演じる、落語を鑑賞する経験)を重ねることはユーモアスタイルやユーモアを用いたストレス対処と関連するか(研究1)、それぞれの経験から何がもたらされたと認識しているか(研究1)、落語への評価が日本文化への愛着や社会的信頼につながるか(研究2)を検討する。

2. 研究1 落語体験とユーモアスタイル、ユーモアストレス対処、落語体験の効用の関係

2-1. 方法

2-1-1. 調査協力者

社会人落語家24名(男性16名、女性6名、その他の回答2名、平均年齢59歳)だった。

2-1-2. 調査方法

Googleフォームでのオンラインの回答を首都圏の落語教室など社会人落語関係のコミュニティを通じ依頼した。

2-1-3. 調査項目

調査項目は以下の通りであった。

1)落語経験(演じる際の言語、落語口演歴、持ちネタの数、1年のうち高座に上がる平均的な

回数、落語鑑賞歴、好きな噺のジャンル)、2)落語体験による影響：落語を演じる影響、落語の稽古を重ねる影響、落語鑑賞の影響について、いずれも自由記述で尋ねた。

3)自尊心：精神的健康の指標として、ローゼンバーグ自尊心尺度（山本・松井・山成，1982）を用いた。4)ストレスユーモアコーピング：対人ストレスユーモア対処尺度（楳本・山崎，2010）を用いた。これは、ユーモアを用いて対人関係上のストレスに対処する傾向を調べる全 12 項目の尺度である（項目例：「相手にかからかわれたら、自分もおもしろがって一緒に笑う」）。回答肢は、まったく行わない（1）、あまり行わない（2）、ときどき行う（3）、よく行う（4）、いつも行う（5）の 5 件法であった。因子的妥当性、内的整合性、構成概念妥当性が確認されている。5)ユーモアスタイル：日本語版ユーモアスタイル質問紙（吉田，2012）を用いた。普段用いるユーモアの種類やユーモアの好みの傾向の個人差を測定する全 32 項目の尺度である。4 種類のユーモアスタイルを測定する。すなわち、親和的（他者を楽しませ、他者との関係性を良くするユーモア）、自虐的（他者に受け入れてもらうため、自分を過剰に低めるユーモア）、自己高揚的（ストレスや困難に直面してもユーモラスな観点を維持する対処行動としてのユーモア）、攻撃的（からかいや嘲笑といった他者を批判するユーモア）の 4 種類である。回答肢は、全く当てはまらない(1)ー非常に当てはまる(7)、の 7 件法であった。内的整合性とオリジナル尺度と同じ因子構成が確認されている。

3. 結果

3-1. 落語経験の概要

調査協力者の落語体験の概要は以下の通りだった。落語を演じるときの言語は、日本語 22 名、英語 8 名、フランス語 1 名だった。落語口演歴（落語を演じるようになって何年たつか）は、平均 11.38 年、中央値 9 年（範囲：3～50 年）、持ちネタの数は平均 16.75 本、中央値 13 本（範囲：1～55 本）、1 年のうち高座に上がる平均的な回数は平均 11.88 回、中央値 5 回（範囲：2～60 回）、落語鑑賞歴は平均 15.83 年、中央値 10 年（範囲：3～55 年）であった。好きな噺のジャンルは滑稽噺が最も多く(23 人)、ついで、人情噺(14 人)、与太郎噺(12 人)、新作(11 人)、酒飲みや町人の噺(いずれも 10 人)と続いた。

3-2. 落語の高座体験がもたらす影響

「<人前で落語を演じること>によってどのような影響がご自身にありましたか」への自由記述について、回答内容で分類した(Table1)。「声が大きくなった」など人前で話すコミュニケーションに関わる回答が最も多く、ついで、人間関係（仕事仲間以外の人との交流など）、スキルの獲得（事前に下書きを考えるなど）、笑い（笑いのセンスを確認、など）、感情（人が笑ってくれると嬉しい、など）、自信（自信がついた、など）に関わる記述がみられた。

3-3. 落語の稽古がもたらす影響

「<落語を演じるために稽古を重ねる体験>によってどのような影響がご自身にありましたか。」への自由記述について、回答内容で分類した(Table2)。最も多かった記述が「自分の特徴、性格、資質への気づき」と「スキルの獲得」に関する記述で、ついで「健康」「落語そのものへの気づき」「パフォーマンス向上」「言葉」に関する記述が続いた。全体的に、自分自身に向けての効用に関わる記述がみられた。

Table1 「落語を演じる体験」の影響の自由記述の回答

分類	回答数	回答例
コミュニケーション	11	人前で話すことへのトラウマの克服/声が大きくなった/初対面の人とあまり緊張せずに話せるようになった。/声が大きくなった
対人関係	7	仕事仲間以外の人との交流による刺激
スキルの獲得	6	事前に下書きを考えるようになった。
笑い	5	自分の笑いのセンスを確認することが出来た。/人を笑わせる自信が少しついてきた。
感情	4	人が笑ってくれると嬉しい
自信	4	自信がついた
言葉	3	言葉でよりよく伝えることを一層考えるようになった。
落語	2	一度も寄席で落語を見たことのない人に少しは落語というのを分かってもらえた
客観視	2	自分を客観的に見る力が増したように思う。
その他	7	性格がさらに明るくなった/達成感、充実感がある/自分以外の人間を演じることは違った人間になったように感じる。/ストレス解消になる。/思いつかない。見られる事で少しでも身綺麗にしようとする気持ち/認知症予防/演技者である自分が評価され・・・(中略) 他人からの評価を直ちに楽しむことができる

3-4. 落語を鑑賞する体験がもたらす影響

「<落語を鑑賞すること>によってどのような影響がご自身にありましたか。」への自由記述

について、回答内容で分類した(Table3)。「日本の文化、歴史、言語など、いろいろな方面に興味が高まった」など「興味・理解の深まり」が最も多く、ついで「参考」「スキルの獲得」「生活の質」に関する記述が続いた。日本文化への愛着に関わる記述は、「落語を鑑賞する体験」の影響においてもっと多くみられたといえる。

3-5. 対人ストレスユーモア対処との関連

「対人ストレスユーモア対処尺度」の平均得点は、35.96であり、大学生対象に行なった先行研究(梶本・山崎, 2010)での平均点(36.14)と同程度だった。ユーモアを用いて対人関係のストレス対処をする程度は、年齢が低いほど($r=.587, p<.01$)、各ユーモアスタイルがあるほど($r=.420-.633, p<.05$)、対人ストレスユーモア対処をとる傾向であった。落語体験に関しては、落語口演歴($r=-.346, p<.10$)、鑑賞歴($r=-.352, p<.10$)とは傾向のみ、持ちネタの数($r=-.208, n.s$)とは有意な関連は見られなかった。そのため、対人ストレスユーモア対処は落語経験との明確な関連は見出されなかった。

Table2 「落語の稽古を重ねる体験」の影響の自由記述の回答

分類	回答数	回答例
自分の特徴、性格、資質への気づき	5	自分の記憶の不完全さを実感した/切羽詰まらないと真剣にならない昔からの性分が治らないのに気づかされた
スキルの獲得	5	話し方がうまくなった/段々覚えるのが早くなった。/生活の中でノルマをこなそうとする。記憶力にいい影響があるかも。
健康	3	ボケ防止/落語をいかに効率的に覚えるか、脳トレになる。
落語そのものへの気づき	3	稽古を続けないと落語はできない。/プロの演技の凄さが分かるようになった。
パフォーマンス向上	3	(前略)たとえ一人でも聞いてくれる人間(それが師匠と呼べるような存在であればなおさら)が眼前にいれば、それはただの記憶の確認ではなく、パフォーマンスと呼べるようなものになり、聞き手を意識したパフォーマーとしての経験値を上げてくれる。
言葉	3	英会話の向上/英語自体を勉強すること、特に発音を改善するよいモチベーションになった。

その他	6	失敗が糧になることを再確認した。/日々の生活に張りができた。/演義することに自信が持てる /台詞を台本に起こすときに、重複や無駄を減らすのですが、それが仕事で文書を書く時にも応用できるようになった。
-----	---	--

Table3 「落語を鑑賞する体験」の影響の自由記述の回答

分類	回答数	回答例
興味・理解の深まり	7	日本の文化、歴史、言語など、いろいろな方面に興味が高まった。/関連する知識（歴史・文学・民俗学など）が増えた/話の構成がわかるようになった
参考	6	自分が演じる際の参考、手本
スキルの獲得	3	言葉の選び方、伝え方（しぐさを含む。）に影響を受けた/落語は耳で聞いて場面を想像するので、想像力が増したと思う。/失敗をしてもくよくよしなことを覚えた。
生活の質	3	趣味ができた
受容	2	登場人物達が皆、不完全で「しょうもない」人間達であることに救われ、自分をありのまま肯定的に受け入れられるようになった。同時に他者に対しても、受け入れる容量が大きくなったように思う。
影響なし	2	なし
感情	2	感動体験！喜怒哀楽が楽しいです。
評価	2	人の癖を、いいにつけ、悪いにつけ、評価するような聞き方になってきた。
その他	4	交友関係が非常に広がった/ストレス解消になる/モチベーションが高まる/笑いは百薬の長・長生きできそう（長生きしたくは無いけど）

3-6.ユーモアスタイルとの関連

ユーモアスタイル尺度の平均点は Table4 のとおりであった。先行研究（吉田, 2012）での調

査協力者（心理学関連の講義受講者と社会人向けのユーモアセミナー受講者）の数値に比べると、攻撃的ユーモアの得点が低く、自己高揚ユーモアの得点が高い傾向だった。落語体験の程度とユーモアスタイルとの関連を検討した結果、落語口演歴が長い人ほど自虐的ユーモアの程度が低かった($r=-.504, p<.05$)。その他、落語口演歴が長いほど自己高揚的ユーモアの程度が低いという負の相関の傾向のみであった($r=-.393, p<.10$)。持ちネタの数、高座に上がる回数、鑑賞歴とは有意な関連はみられなかった。その他、年齢が高いほど自虐的および攻撃的ユーモアスタイルが低い($r=-.710, p<.01$; $r=-.591, p<.01$)、親和的ユーモアスタイルを取る人ほど自尊心が高い($r=.736, p<.01$)ことも示された。

4. 考察

研究1では、落語の口演、稽古、鑑賞といった落語体験が演者にもたらす影響、落語体験とユーモアスタイルおよびユーモアスタイルコーピングとの関係を社会人落語家対象に調査した。結果をまとめると、落語を演じる影響は「コミュニケーションへの影響」、落語の稽古の影響は「自分の特徴、性格、資質への気付き」、鑑賞の影響は「興味・理解の深まり」に関する記述が最も多かった。ユーモアスタイルとの関係では、落語口演歴が長い人ほど、自虐的なユーモアの程度が低かった。対人ストレスユーモア対処は落語経験との明確な関連は見出されなかった。

Table4 ユーモアスタイル尺度の基礎統計量

項目	平均値	中央値	最小値	最大値
親和的	5.42	5.50	3.33	7.00
自虐的	3.49	3.50	1.29	5.43
自己高揚	4.13	4.07	2.1	5.86
攻撃的	2.62	2.50	1.14	4.29

注：得点範囲は1-7。

落語体験（稽古、高座、鑑賞）による影響の自由記述では、自分の特徴や資質への気付き、人前で話すなどコミュニケーションも含む種々のスキルの獲得、日本文化や落語への興味や理解の広がりへの言及が多くみられた。落語の稽古に取り組み、高座に上がる体験を重ねる中で、興味や関心も広がり、自分の新たな資質にも気づき、落語鑑賞時の落語の見方も変わり、ユーモアだけにとどまらない影響を演者にもたらしているのかもしれない。そこで次の研究2では、自由記述で得られた「興味・関心の広がり」に着目し、落語体験が日本文化への愛着や社会的信頼につながるかを検討する。

5. 研究2 落語体験と日本文化への愛着と社会的信頼との関連

研究2では、同じく社会人落語家を対象として落語体験が日本文化への愛着や社会的信頼と関わるのかを検討した。そして、日本文化への愛着は自分が生きる社会の人々一般への信頼へつながるのかを検討した。

5-1. 方法

5-1-1. 調査協力者

社会人落語家 32 名（男性 21 名、女性 11 名、平均年齢 57.25）だった。

5-1-2. 調査方法

研究1と同様、Google フォームでのオンラインでの回答を首都圏の落語教室など社会人落語関係のコミュニティを通じ依頼した。

5-1-3. 調査項目

調査項目は次の通りであった。1) 落語体験：研究1と同様の項目を尋ねた。2) 日本文化への愛着：日本文化への愛着については、「日本の歴史に興味がある」「日本の美術作品に興味がある」「日本の文化についてもっと知りたい」の3項目を用いて、“(1)まったくそう思わない”“(4)どちらともいえない”“(7)強くそう思う”の7段階で尋ねた。3) 落語への愛着：落語への愛着については、「落語教室で会う人びとに親しみを感じる」「落語が好きの人に親しみを感じる」「落語家（噺家）に親しみを感じる」の3項目を用いて「日本文化への愛着」と同様の7段階で尋ねた。4) 社会的信頼：社会的信頼については、他者一般への信頼の期待を測定する一般的信頼尺度(山岸, 1998)を用いて測定した。「ほとんどの人は信用できる」「たいていの人は、人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する」「ほとんどの人は他人を信頼している」「ほとんどの人は基本的に正直である」「私は、人を信頼するほうである」「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」を用いて5件法で尋ねた。5) 落語教室に通うことの影響：「あなたは、<落語教室に通うこと>によってどのような影響がご自身にありましたか。思いつくことをいくつでも結構ですので、差し支えない範囲でご経験をお書きください」と尋ねて自由記述で回答を求めた。6) 落語教室の存在：「あなたにとって、<落語教室>とは、どのような存在でしょうか。思いつくことをいくつでも結構ですので、差し支えない範囲でご経験をお書きください」と尋ねて自由記述で回答を求めた。7) 個人属性：年齢と性別を尋ねた。

Table5 研究2で測定した変数の基礎統計量

変数名	平均値	中央値	標準偏差	最小値	最大値
落語口演歴（稽古も含めて落語を演じるようになって何年たつか）	9.97	8.00	9.44	1.00	50.00
あなたの持ちネタの数	16.34	11.50	15.39	2.00	70.00
1年のうち高座に上がる平均的な回数	8.06	4.00	11.00	1.00	50.00
落語鑑賞歴（年）	14.00	10.00	12.59	1.00	55.00
日本の歴史に興味がある	4.97	5.00	1.73	1.00	7.00
日本の美術作品に興味がある	4.69	5.00	1.64	1.00	7.00
日本の文化についてもっと知りたい	5.59	6.00	1.27	2.00	7.00
落語教室で会う人びとに親しみを感じる	6.34	7.00	0.83	4.00	7.00
落語が好きな人に親しみを感じる	6.00	6.00	0.88	4.00	7.00
落語家（噺家）に親しみを感じる	5.63	6.00	1.01	4.00	7.00
ほとんどの人は信用できる	4.59	5.00	1.10	2.00	6.00
たいていの人は、人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する	5.44	6.00	1.19	3.00	7.00
ほとんどの人は他人を信頼している	4.47	4.50	1.08	2.00	7.00
ほとんどの人は基本的に正直である	4.44	4.00	1.11	2.00	6.00
私は、人を信頼するほうである	5.22	5.00	0.87	3.00	7.00
ほとんどの人は基本的に善良で親切である	5.00	5.00	0.95	3.00	6.00
一般的信頼尺度	4.86	5.00	0.74	3.17	6.17
日本文化への愛着	5.08	5.17	1.27	1.33	7.00
落語への愛着	5.99	6.00	0.73	4.00	7.00

6. 結果

6-1. 調査協力者の落語体験

調査協力者の落語体験の概要は以下の通りだった。落語を演じるときの言語は、日本語 20 名、英語 22 名、フランス語と中国語がともに 1 名であった。落語口演歴は、平均 9.97 年、中央値 8 年（範囲：1-50 年）、持ちネタの数は平均 16.34 本、中央値 11.5 本（範囲：2-70 本）、1 年のうち高座に上がる平均的な回数は平均 8.06 回、中央値 4 回（範囲：1-50 回）、落語鑑賞歴は平均 14 年、中央値 10 年（範囲：1-55 年）であった。好きな噺のジャンルは滑稽噺が最も多く（22 人）、ついで、人情噺（17 人）、新作（14 人）、与太郎噺（12 人）、酒飲みや町人の噺（11 人）と続いた。

6-2.落語教室に通うことの影響

「落語教室に通うことの影響」で回答を求めた自由記述について、内容を元に分類した(Table6)。対人関係の広がりへの言及が最も多く、ついで人前で話せるといったコミュニケーションスキルについての記述がみられた。日本文化への愛着、新たな考え方、健康、自信についての記述がそれに続いた。

6-3.落語教室の存在

「あなたにとって、<落語教室>とは、どのような存在か」で回答を求めた自由記述について、内容を元に分類した(Table7)。人間関係に関わる記述が最も多く、ついで「趣味」であるとの捉え方がある一方で「修業の場」という捉え方もあった。その他、「知らない場を知る」「自分への内省・発見」のような自分に関する効用が得られる場、「ライフワーク」「生きがい」のような生涯にわたって自身の人生に影響を及ぼす場、「生涯学習」「言語学習」のような学びの場としてとらえる記述が見られた。

6-4. 落語体験と日本への愛着、落語への愛着との関連

落語体験の程度が日本への愛着や落語への愛着と関連するかを検討した。落語体験の指標(落語口演歴、持ちネタの数、1年のうち高座に上がる平均的な回数、落語鑑賞歴)は項目ごとに分析に用いた。日本への愛着3項目($\alpha=.748$)、落語への愛着3項目($\alpha=.717$)は信頼性係数が十分高かったため、それぞれ平均得点を分析に用いた。落語体験と日本への愛着、落語への愛着との相関係数を算出した(Table8)。

その結果、1年のうち高座に上がる平均的な回数が多いほど(95%CI=.060~.657, $p=.023$)、落語鑑賞歴が長いほど(95%CI=.021~.635, $p=.039$)日本文化への愛着が高かった。また、落語鑑賞歴が長いほど(95%CI=-.022~.608, $p=.066$)落語への愛着が高い傾向であった。なお、落語への愛着が高いほど日本文化への愛着も高かった(95%CI=.187~.724, $p=.003$)。

6-5.落語体験、日本文化への愛着、落語への愛着と社会的信頼の関係

一般的信頼尺度の信頼性係数の高さは十分であったため($\alpha=.792$)、平均点を求めて尺度化し、落語体験の指標との相関を検討した。1年のうち高座に上がる平均的な回数が多いほど一般的信頼が低い傾向がみられたのみで($r=-.299$, 95%CI=-.586~.056, $p=.097$)、その他の指標は有意な相関はみられなかった($r=-.145$ ~.005)。日本文化への愛着、落語への愛着も一般的信頼尺度とは有意な相関がみられなかった($r=-.125$, $r=.231$)。

そこで、一般的信頼尺度の項目ごとに落語体験との相関をみると、1年のうち高座に上がる平均的な回数が多いほど、「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」に否定的だった($r=-.407$, 95%CI=-.662~-.068, $p=.021$)。また、落語鑑賞歴が長いほど同項目に対して否定的な傾向だった($r=-.305$, 95%CI=-.591~.049, $p=.090$)。落語体験があるほど他者一般への信頼

感が高いという直接的な関係は見られなかった。むしろ、落語体験の指標の一部が一般的信頼感の一部の項目の低さとつながっていた。

Table6 「落語教室に通うことの影響」の自由記述の分類

カテゴリ	記述数	記述例
人間関係	13	年齢、性別、職種を超えた人と仲良くなれる／年齢を超えた方、仕事以外の方との付き合いが増えて楽しくなった。
コミュニケーションスキル	8	会話力が上がった 人前で話しても緊張度合いが少なくなった。
日本文化への愛着	3	日本の文化（歴史、着物等）についてより興味が増えて楽しくなった。
新たな考え方	3	なんでもやってみよう／落語のバカバカしさが身に沁み、たいていのことは、「つー」「るー」とか言っていることに比べればまともかなと思えるようになり、気にしなくなった。／新しいアイデアや考え方を知ることができる
健康	3	頭の体操にもなった、老化防止に役立っている
自信	3	自分に自信が持てる
落語への愛着	2	落語に親しみを感じるようになった。
目標	2	人生の目標が設定できる
ユーモア	2	人と話すときユーモアが必要だ
記憶力	2	暗記でなんでも覚えることができる
趣味	2	趣味が増えた
非日常体験／生活の質（QOL）／稽古での講評／ストレス対処／落語への新たな気づき／価値観／性格改善／その他（質問内容とは異なる回答）／なし	各 1	お客さんの前で発表するという非日常体験ができる／生活にメリハリや緊張感が生まれた。／師匠に稽古をしてもらう感覚は、会社仕事での研修とは全く違う感覚です。教室通いは、師匠に”怒られたい””褒められたい”との思いで毎回楽しみにしています。／ストレス解消／プロの落語家の上手さがわかるようになった／色々な価値観、生き方があると感じられた。／内向的な性格がやや改善された。／場所が遠すぎる／なし
総計	52	

注：一人で複数の記述をした場合はそれぞれカウントしている

Table7 「落語教室の存在」の自由記述の分類

カテゴリ	記述数	記述例
人間関係	10	社交の場／会社や別の趣味のサークルとは異なるタイプの人に会えて刺激になり、楽しい。／幅広い年代と趣味を通じて知り合える良い機会になっている。／人との交流のノウハウの原点
趣味	4	老後の趣味／趣味
修行	4	修業の場／趣味というにはキツイので、仕事の一つまたは、修行の一つかなあ。
楽しみ	4	師の師匠や、仲間と一緒に楽しめる場所／月一度の稽古日が楽しくなった。
日本文化	3	日本の文化を知るきっかけになる場
知らない世界を知る	2	知らない世界を知る場
自分自身の内省・発見	2	定期的に自分自身を見直す場／新しい自分を見つける場所。
ライフワーク	2	自分のライフワークにとって必要なもの
生きがい／居場所／ストレス解消／モチベーション／言語学習／心を豊かにする／仕事との切り替え／リフレッシュ／投資／生涯学習／コミュニケーション／可能性の広がり／自己表現／思考の深まり／自己肯定感	各1	生きがいの一つ。／自分の居場所の一つ。／ストレス解消の場／落語を覚えている（ママ）為のモチベーションを保つ場所／英語の勉強の場／また落語という楽しい会は心を豊かにさせてくれるような気がします。（落ち込んでても立ち直れそう。生活の潤滑油的なものかも）／仕事からの頭の切り替え。／他の英語落語家と親しめる、月一回のリフレッシュタイム／将来への投資／生涯教育の場／話題が増える／自分の可能性を広げてくれる／自己表現の場／お金を稼ぐ・効率的なこと（仕事など）や新しいこと（欧米化、テクノロジー）一辺倒の思考から、古きよきもの、長く変わらないアナログ的なものが自分の引き出しとして増えたことがとても精神の健全性、思考の深みなど良い影響を与えています。／自己肯定感を高める
総計	46	

注：一人で複数の記述をした場合はそれぞれカウントしている

Table8 落語体験と日本文化および落語への愛着との相関

	1	2	3	4	5	6
1 落語口演歴	-					
2 あなたの持ちネタの数	.596 **	-				
3 1年のうち高座に上がる平均的な回数	.633 **	.786 **	-			
4 落語鑑賞歴	.719 **	.558 **	.785 **	-		
5 日本文化への愛着	.170	.262	.400 *	.367 *	-	
6 落語への愛着	.231	.210	.295	.329 +	.503 **	-

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

なお、日本文化への愛着、落語への愛着と一般的信頼尺度の各項目との相関をみると、落語への愛着が高いほど「私は、人を信頼するほうである」に肯定的だった($r=.498$, 95%CI=.180～.721, $p=.004$)。

6-6.落語体験は日本文化と落語への愛着から社会的信頼の関係

以上の相関分析を元にして、落語体験が日本文化と落語への愛着を通じて社会的信頼につながるかを検討した。具体的には、1年のうち高座に上がる平均的な回数と落語鑑賞歴が日本文化への愛着を高め、日本文化への愛着が落語への愛着を高めて「私は、人を信頼するほうである」の高さと「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」の低さとつながるというモデルを検討した。

その結果、落語の鑑賞歴および「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」に関して有意なパスが示されなかったため変数を外してモデルを再検討し、最終的に Figure1 のモデルを採用した。高座に上がる回数が多いほど日本文化への愛着が高く、落語への愛着が高く、落語への愛着が高いほど「人を信頼するほうである」に肯定的であるというモデルであった。なお、高座に上がる回数が落語への愛着を通じて日本文化への愛着につながるモデル、高座に上がる回数が落語への愛着と日本文化への愛着のそれぞれにつながりこれらが信頼の項目につながるモデルも検討したが、適合度指標は全体的に大きく下がった(CFI=.367, RMSEA=.408, GFI=.790; CFI=.629, RMSEA=.383, GFI=.857)。

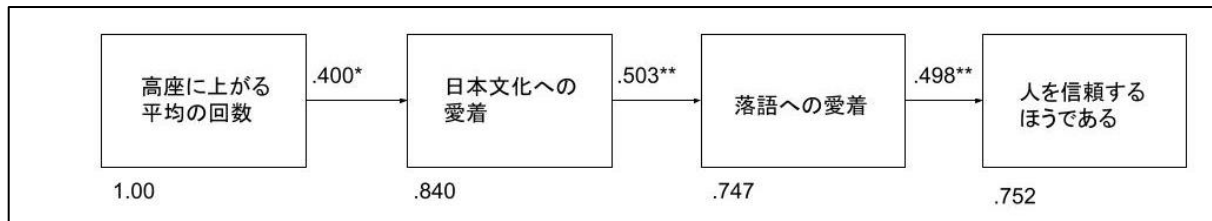


Figure1 落語体験、日本文化への愛着、落語への愛着と信頼の構造方程式モデル

係数は標準化偏回帰係数

X^2 乗値=7.33, $df=3$, $p=.062$, CFI=.832, RMSEA=.212, GFI=.911

7. 考察

研究2では、落語教室に通うことの影響や意義を検討するとともに、落語への体験が落語や日本文化への愛着を通じて社会的信頼につながるかを検討した。落語教室の影響には対人関係の広がり、コミュニケーションスキル、日本文化への愛着の記述がみられた。

社会的信頼との関連においては、高座に上がる回数が多いほど日本文化への愛着に繋がり、それが落語への愛着につながって「人を信頼するほうである」への肯定的な回答につながった。今回はデータ数が32と少なかったため、潜在変数を仮定したモデルの検討では適合度が十分高いモデルの採択へと至らなかった。今後データ数を増やしてさらに検討する必要がある。

なお、高座に上がる回数が多いほど「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」に否定的という予期せぬ結果も見られた。この結果は、落語会を開催する際に接する人々との間の経験によるのか、習得した噺の内容（必ずしも登場人物が善良で親切な善人ばかりとは限らない）や落語における人間観（立川談志による「落語は人間の業の肯定である」という落語観や人間観）の影響によるのか、今後聞き取り調査により検討する必要がある。

8. 総合考察

本研究では、落語教室に通うアマチュア落語家を対象に、落語教室に通って落語を稽古する、高座に上がる、落語を鑑賞するという落語体験が何をもたらすのかを2回の調査で検討した。その結果、落語体験はユーモアスタイルやユーモアを用いたストレス対処との直接の関連は見出されなかったが、自由記述より落語体験が人間関係の広がり、コミュニケーションを始めとする各種スキルの獲得、落語を始めとする日本文化の文化への愛着につながる言及が見出された（研究1）。それをふまえて日本文化や落語への愛着、一般的信頼をとりあげて関連をさらに検討したところ、高座に上がる回数が多い人ほど日本文化への愛着が高く、落語への愛着が高い人ほど、「私は、人を信頼するほうである」と回答していた（研究2）。落語教室の存在については、人間関係を広げる場、趣味、修行、楽しみ、日本文化を知る場としての捉え方がみられた。落語教室はネットワークを広げ、さまざまなスキルの獲得や楽しみにつながり、文化の理解を深める社会的資源として機能しているといえる。

今後の課題としては、以下の2点があげられる。まず、調査協力者の人数が十分でなかった一方で落語体験のばらつきが大きかったため、回答にも影響した可能性がある。そのため、今後は調査対象者を増やし、落語歴の長い社会人落語家にもさらに調査をおこなう必要がある。あわせて、インタビューなどウェブ調査以外の方法で落語体験が自身にもたらしたものを

2点目は、体験の変化の過程を今回は検討できなかったことである。社会人落語の熟達者を対象に、落語を始めた頃から現在までの経過についてインタビューでたずね、落語体験の影響と「落語」の意味付けの変容過程を今後明らかにする必要がある。

文献

- 文化デジタルライブラリー, 2018, 「落語：早わかり | 大衆芸能編・寄席」, 文化デジタルライブラリーウェブサイト, (2023年7月17日取得, <https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc20/geino/rakugo/index.html>) .
- 落語芸術協会, 2007, 「落語ってなに? - 落語はじめの一步」, 落語芸術協会ウェブサイト, (2023年7月17日取得, <https://www.geikyo.com/beginner/what.html>) .
- 林直保子, 2021 「地域文化資源の鑑賞が地域の人々への愛着と信頼に及ぼす影響: 地域文化資源としての大坂画壇に焦点を当てて」社会的信頼研究 2, 43-52.
- 楯本知子・山崎勝之, 2010, 「対人ストレスユーモア対処尺度 (HCISS) の作成と信頼性, 妥当性の検討」『パーソナリティ研究』18(2): 96-104.
- 野村亮太, 2013, 「落語没頭体験尺度の作成」『笑い学研究』 20: 32-43.
- 野村亮太・岡田猛, 2014, 「話芸鑑賞時の自発的なまばたきの同期」『認知科学』 21(2): 226-244.
- 野村亮太・丸野俊一, 2007, 「ユーモア生成過程にみられる演者と観客による関係システムの解明」『認知科学』14(4): 494-508.
- 小田雄仁・東海林麗香, 2017, 「落語を取り入れた授業とその後にみられたインタラクティブな関係性の広がり」『教育実践学研究: 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』22: 207-216.
- 清水晶子, 2006, 「看護師のユーモアと笑い及びユーモアを用いたストレスコーピングに関する考察」『笑い学研究』 13: 85-90.
- 浦和男, 2021, 「「笑い」による社会的信頼関係の構築 - 史的観点からの考察 -」『社会的信頼研究』2: 1-23.
- 山岸俊男, 1998, 「信頼の構造」 東京大学出版会
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子, 1982, 「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』30(1): 64-68.
- 山崎瑞紀・高木彩・池田謙一・堀井秀之, 2008, 「鉄道事業者に対する社会的信頼の規定因: 分散構造分析を用いたモデルの構成」『社会心理学研究』 24(2): 77-86.
- 吉田昂平, 2012, 「日本語版ユーモアスタイル質問紙の作成」『笑い学研究』19: 56-66.

What the Experience of Learning Japanese Rakugo in a Rakugo Class Can Bring

Noriko Katsuya³

[Abstract]

This study examined what the experience of performing Rakugo at a local Rakugo class brings. We conducted an online survey of amateur rakugo performers attending rakugo classes in Tokyo. Study 1 examined how the experience of viewing rakugo, practicing rakugo, and performing rakugo orally affected them, and the relationship between rakugo experience and humor style and stress coping using humor; Study 2 used free descriptions to determine the impact of attending rakugo classes as a social resource and the significance of their existence. In addition, we examined whether the rakugo experience is related not only to attachment to rakugo, but also to attachment to Japanese culture, and to trust in others in general. The results showed that free descriptions of the experience of rakugo led to the expansion of relationships, the acquisition of various skills including communication, and attachment to Japanese culture, including rakugo (Study 1). From Study 2, the higher the number of times a person took the stage in rakugo, the higher the attachment to Japanese culture, and the higher the attachment to Japanese culture, the higher the attachment to Rakugo, and the higher the attachment to Rakugo, the higher the "I am a person who trusts others". An unexpected result was found: the more often a person took the stage in rakugo, participants more negatively responded to the statement "Most people are basically good and kind."

Keywords and Phrases: Rakugo, Social Trust, Social Resources, Attachment to Japanese Culture, and Attachment to Rakugo

³ Project Assistant Professor, Tojisha-Kenkyu Laboratory, Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo